食事への介入を通してコミュニケーションに変化がみられた一症例

かがわ総合リハビリテーション病院　リハビリテーション部
言語聴覚士 井上 明花、作業療法士 泉 健二、理学療法士 小松 拓司
看護療育部　保育士 太田 真奈美　児童指導員 北山 美穂

キーワード：食事訓練、環境設定、コミュニケーション手段

要旨

平成27年度より、こども発達支援センター通園児の食事訓練に作業療法士（以下OT）に加え、言語聴覚士（以下ST）も介入するようになった。STも実際の場面に介入することにより問題点を明確に把握し、密な連携をとることができるようになった。

今回、状況の理解が難しく癇癪や自傷行為の多かった児に対し、視覚的情報を提示するなど環境設定を行ったことで状況の理解がよくなった。自分の置かれている状況が理解出来ず、不安や混乱を起こす児に対し、1日のスケジュールを作り、それを予告し理解を促すことが有効であるとされている。本症例に関しても、食事場面のスケジュールを細分化して視覚的に提示したことで状況を理解し、落ち着いて食事を取ることができるようになった。また、視覚的な情報の提示を食事場面から徐々に訓練場面や1日の流れへ拡大させていったことで、絵カード等を使ったやりとりが定着しコミュニケーションに変化がみられたと考える。

1.　はじめに

平成27年度より、こども発達支援センター通園児の食事訓練にOTに加え、STも介入するようになった。状況の理解が難しく食事に強い拒否を示す児に対し、多職種で連携を取り関わった結果、食事に集中し食べられるようになった。食事への介入を通して、状況の理解がよくなり、行動の切り替えがスムーズになるなどコミュニケーションに変化がみられたので報告する。

2.　症例

6歳男児（平成24年8月～28年3月までこども発達支援センターに通園）
医学的診断名：染色体異常、両大血管右室起始症、両側反回神経麻痺、気管軟化症、てんかん
発達年齢：1歳10ヶ月
運動機能：独歩可能
食事の状況：2歳2ヶ月時より経口摂取開始。自力でスプーンを操作し摂取することが可能であるが、拒否が強く全介助にて摂取をしている。
コミュニケーション：直接行動が主で要求手段が少なく、有意味語は数語。思い通りにならない場面では癇癪を起こし、自傷行為あり。

3.　アプローチ

平成27年9月～28年3月までの7ヶ月間、活動の見通しを立ちやすくするために、タイマーや絵カード等を用いてスケジュールや時間を視覚的に提示し、活動の取りかかりや切り替えを促した。チーム間の課題であった食事場面から導入し、徐々にそれぞれの訓練場面、こども発達支援センター通園時の1日へとアプローチを広げていった。

4.　経過

〈第1期〉食事場面の環境設定として別室の一角をパーティションで仕切り、刺激が入りにくい空間を設定した（図1）。

図１　食事場所

食事時間や食事量を視覚的に提示し、お茶などの要求は絵カードを使用した（図 2、3）。しかし、児の刺激となるものが多く、集中して食事をすることが難しかったため、要求として一番多かったお茶の要求のみとした。

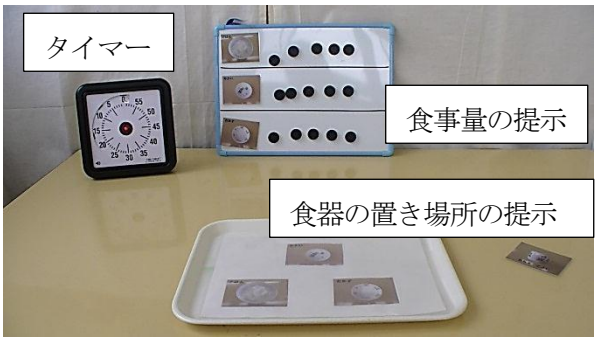

図２　食事に関する情報

図３　要求カード

〈第２期〉食事前後に配膳や歯磨き等の自分で行う活動を取り入れ、食事に関連した一連の活動の流れが理解出来るように関わった（図 3）。

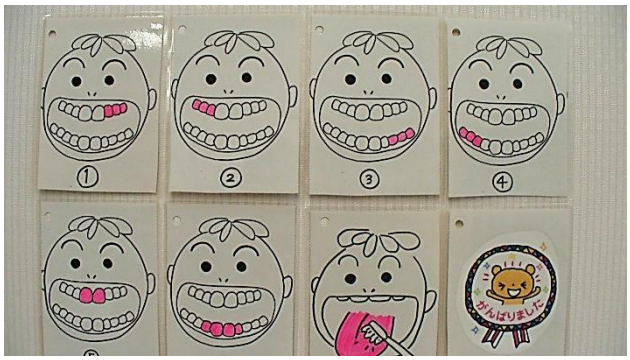

図３　歯磨き手順カード

それぞれの訓練場面においてもタイマーや絵カード等を用いて視覚的な情報の提示の意味を理解出来るよう統一した関わりを行った（図 4）。その結果、食事場面では要求の選択が可能となり、食事前後の一連の活動が自力で可能となった。訓練場面では、スケジュールを提示することで自分のやりたいことを目標に苦手な課題へも取り組めるようになり、癇癪や自傷行為が減少した。また、時間の予測が出来るようになり、示された時間における集中力が向上した。

図４　ST 訓練場面でのスケジュール

〈第３期〉食事や訓練場面などで練習してきたスケジュールの提示をこども発達支援センターの通園時の１日の流れへ拡大させた（図 5）。その結果、各活動の切り替えがスムーズになった。また、食事時間になると保育室に入れなかった状態も解消され、スムーズに食事の準備に取りかかれるようになった。

図５　１日のスケジュール

5.　結果

拒否が強かった食事場面でスムーズにとりかかれるようになった。また、以前は遊びながら食べていたが、食事に集中できるようになった。要求カードを作成したことで、絵カードを使った要求が定着した。

生活場面では、絵カード等の視覚的な情報を提示したことにより、自分から提示された情報を確認し活動の流れを理解して行動できるようになった。また、活動の見通しが立てられるようになったことで癇癪や自傷行為が減少した。

6.　考察

今回、状況理解が難しくコミュニケーション手段の少ない児に対し、食事での問題をきっかけにチームでアプローチ方法の検討を行った。それぞれの活動場面で絵カードやタイマー等の視覚的情報を提示したことで、活動の見通しや時間の流れなどの状況理解が促され、写真や絵カードを介したコミュニケーションへの促しになったと考える。また、定期的にチームで検討会を行ったことで、情報を共有することができ、それぞれの活動場面へアプローチを拡大させていくことができた。チームで児に合わせた環境設定を行い、絵カードを介したやりとりを習慣化したことにより児からの自発的な要求手段の使用に繋がったと考える。これらのことが、児のコミュニケーション能力の向上に有効であったと考える。

【出典先】
平成 28 年度かがわ総合リハビリテーションセンター研究年報

【参考文献】

1）松本治雄・後上鐵夫 編著：言語障害　事例による用語解説〔第２版〕ナカニシヤ出版　45-53　2007
2）佐藤暁 著：実践満載　発達に課題のある子の保育の手立て　岩崎学術出版社　24-29　2010